

目次

- ・ 第5回例会報告
ハンガリー国立図書館の成立－ミラー・ヤーカブ・フェルディナンドを中心に（伊香左和子）
- ・ 1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会・総会
- ・ 研究例会

第5回例会報告（1997年3月8日 法政大学）

ハンガリー国立図書館の成立－ミラー・ヤーカブ・フェルディナンドを中心に
伊香左和子
（大谷女子大学）

1. はじめに

ハンガリーの国立セーチャーニ図書館は、19世紀初頭に一貴族が国に寄贈した個人コレクションをもとに設立されている。寄贈された個人コレクションが、国立図書館へと成長していく過程を、初代図書館長ミラー・ヤーカブ・フェルディナンドの活動を中心に、辿っていった。ミラーは1802年の図書館創立時に館長に任命され、1823年に亡くなるまでその地位にとどまっている。創立から1807年までを第一期、国立博物館として新たな出発をむかえた1808年から1823年までを第二期としてみていくことにする。

2. 国立図書館の設立期（1802-1807）

フェレンツ・セーチャーニ伯爵が、それまでに自ら築き上げたハンガリー関係コレクション（図書・地図・貨幣等）を、母国に寄贈したのは1802年のことであった。寄贈にあたって、伯爵は、国立図書館を設立してこのコレクションを一般に公開すること、その図書館にセーチャーニの名をつけることを条件にあげている。図書館員の選定を伯爵家に委ねること、コレクションの追加と目録作成はそれまで通りセーチャーニ家の費用でおこなうことなども条件にあった。図書館の監督は、ハプスブルク家の一員としてハンガリーの統治をおこなっているパラティーナ大公に委ねられた。

ペシュトの旧聖パウロ修道院の建物があてられることが決まり、11月23日、正式に国立図書館の設立が認められた。初代図書館長に、ナジバラード・アカデミアの歴史と統計学の元教授ミラー・ヤーカブ・フェルディナンドが任命、その他に書記と司書職員が一名ずつおかれた。1803年3月にセーチャーニ家のコレクションが伯爵のショプロン郊外の居城から新しい建物に移され、ミラーと二人の部下によって

整理されなおされた。

図書館は8月に一般に公開された。この時期にミラー館長を悩ませていたのは、閲覧室が用意できないことと、光熱費や図書の修復など細々とした運営基金をどこから捻出するべきかといったことであった。セーチャーニ家からは増加コレクションが送られてきてはいたが金銭的な寄付はなかった。職員の給与は大学基金でまかなわれることになっていたものの、その他の費用までは期待できなかった。

1804年には納本についての規定が設けられ、国内で出版された図書はすべて1部が国立図書館に納められることになった。しかしすでにウィーンの王立図書館、ペシュトの大学図書館に納めていることもあり、完全に実施されるまでにはかなりの時間がかかることになる。

3. 国立博物館設立 (1808-1823)

ナポレオンとの和睦が成立し国内が一応落ち着くと、パラティーナ大公と館長ミラーは、図書館の法的基盤を確立させることを検討し始めた。同時に、図書以外のコレクションを公開することも考えていた。二人の計画はロンドンの大英博物館のような機関を設けることであった。1808年10月に国立博物館法が制定される。

博物館基金が設定されることも決議され、議会が用意した他に大公その他の個人からも寄付がよせられた。

1809年のナポレオンのウィーン占領で一時停滞するものの、計画は順調に進められ、1813年に新しい建物に移った。博物館・図書館と組織はかわったが、ミラーの全体の管理者としての立場に変わりはなく、図書館の成長も順調であった。

博物館設立の頃から、図書館の運営は完全にパラティーナ大公の手に握られた。職員の選定も大公によっておこなわれるようになってきている。

1819年、ミラー館長は博物館に寄贈された資料を許可なく販売、その代金で別の資料を購入して自分のコレクションに加えていた、という疑いをかけられた。この事件の詳細は明らかにはなっていない。セーチャーニ家が購入し図書館に寄贈した資料で、ペシュトの書店にわたされたものがかなりあることは確かなようである。書店は別の図書をミラー個人のために提供したと証言した、という。しかしミラーの死後彼の家からそれらしい資料は発見されていないこと等から、現代の研究者の中には、ミラーは寄贈書のうち他と重なった物、あまり重要と思われぬ物を、他のもっと貴重な資料と交換していたのではないかと推測する者もいる。この疑いが明らかにされないまま、ミラー館長は1823年11月に病気のため亡くなった。

4. まとめ

創業者セーチャーニとパラティーナ大公、そしてミラー館長は、それぞれ経済力、公権力、実務の面で尽力をつくしており、そのバランスの上に図書館の基盤が築き上げられた。この三人はまた、当時のハンガリーの3グループを代表してもいた。セーチャーニ伯爵は長くウィーンのハプスブルク家とハンガリーの統治権をめぐる協調と対立を繰り返してきたハンガリー大貴族家の当主であり、パラティーナ大公はそのハプスブルク家の代表者である。そしてミラーは18世紀末になって新たに台頭してきた、一般階級出身の知識人であった。「国立」という言葉にそれぞれが思い描いていたイメージも、微妙には異なるが異なっていたように思われる。パラティーナ大公は自分が委ねられているハンガリー国の図書館と思い、セーチャーニ

伯爵は民族文化のコレクションと考えていたように見える。ドイツ系ハンガリー人の家庭に生まれ、ラテン語を公用語とする教育を受けてきたミラーは、広く一般の知識人に開かれた場所を想定、必ずしもハンガリーにこだわってはいないようであった。この三者の背景の違いは、時に対立関係をもたらすことになる。時代の流れも影響していた。ナポレオンの脅威がとり除かれた1810年代に、ハプスブルク家はハンガリー議会を閉鎖し完全に支配下に置こうとしてきた。その中では、セーチェーニ伯爵は図書館の主導権をパラティーナ大公に渡さざるをえなくなってくる。またヨーロッパ全土にひろまった民族主義の流れの中で、ミラーは取り残されていった。1820年のセーチェーニ伯爵の死と、1823年のミラーの死、更に1825年のハンガリー議会再開をうけて、国立図書館は、新しい発展の時代に向かうことになる。

* 稲村徹元氏の発表要旨は、都合により次号に掲載いたします。(事務局)

1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会・総会
- 発表者および参加者の募集について -

日本図書館文化史研究会では、下記の要領で研究集会・総会を開催します。研究集会での研究発表希望者と参加希望者を募集します。

◇ 研究発表希望者は、6月30日までに、氏名、住所、電話番号、所属、発表の題名・200字程度の要旨を記載し、封書(またはFAX)で事務局あて申し込んでください。内容は、(1)テーマ「私にとって図書館文化史とは」(2)自由発表、の2部構成とします。発表者はそれぞれ3~4名、合計6~8名を予定しています。発表時間は40分程度です(質疑応答を含む)。

◇ 研究集会・総会への参加希望者は、「はがき」で7月15日までに、事務局あてお申し込みください。

記入事項：氏名、住所、電話番号、所属、懇親会参加希望の有無
参加をお申し込みの方には、8月中旬にプログラム・会場案内を郵送します。

記

1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会・総会開催要領

日時 : 1997年9月14日(日)午後1時

~15日(月・祝日)午後4時(予定)

会場 : 立教大学 7号館 7101号室(〒171 豊島区西池袋 3-34-1)

JR池袋駅西口から徒歩10分

参加費 : 1,000円(資料費等、当日受付で)

プログラム(予定) :

第1日(9/14) テーマ「私にとって図書館文化史とは」発表および討論(午後)

第2日(9/15) 自由発表および質疑応答(午前および午後)

* 日本図書館文化史研究会総会（午後3時～4時）

第1日終了後、「懇親会」を予定しています。会費は7,000円程度です。ふるってご参加ください。また、第2日目の昼食は各自持参されるか、池袋駅周辺でおとりください。

なお、宿泊は斡旋できませんので、各自で手配してください。

研究集会・総会事務局
中林隆明

~~~~~ 研究例会のお知らせ ~~~~~

1997年度 第1回

日時：1997年6月21日（土）午後1時～3時（予定）

場所：国立国会図書館 午後1時西口に集合

発表：石井 敦（元東洋大学）：唯物論者の見た東京の図書館----併せて戸坂潤の図書館論を評す

若松昭子（慶応義塾大学大学院）：米国ニューベリー図書館の印刷史コレクション

◇次回の予定

1997年度 第2回 12月 日時・場所は未定

\* 例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度です。中間報告的なもの、情報交流（提供）などでも結構です。申込みは事務局まで。

~~~~~ 新入会員 ~~~~~

新入会員の連絡先、住所変更および訂正は「会員名簿」をご覧ください。

◇事務局からのお知らせ

紙面の関係で、『図書館文化史研究』（15号）の原稿募集の記事が掲載できませんでした。詳しくは、「ニューズレター」59号（1997.2.10）をご覧ください。

日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明